

学習成果を導くために必要な教師の教授意図にもとづく関わり方の検討
—特に自己開示と受容を促すための関わりについて—

専攻 教科領域教育学
コース 生活健康総合内容系
学籍番号 M07238A
氏名 田住 高章

I 研究の目的

現代の子どもや教育現場での悩みである人間関係に関する問題を解決し、子ども個々人の成長、そして仲間関係を構築していくためにも、子ども相互の自己開示と受容の関係を成立、促進させる教師の関わりは大切である。しかし、他の様々な教師行動も含めて、教師がどのように考えてその関わりをしたのかが分からなければ、本当にその関わりが子ども個々人にとって有効かどうかは分からない。そのため、教師が関わり（教師行動）を決定するまでの思考過程、すなわち意思決定過程に注目する必要がある。

そこで本研究では、教師の意思決定過程に着目し、教授意図にもとづく自己開示と受容を促すという教師の関わり方について実践的に検討することを目的とした。

II 研究の方法

1. 対象

兵庫県内の公立小学校6年生を対象に、そのクラスの担任教師（教職経験9年目の男性）が授業者となり、器械運動領域の跳び箱運動を教材とする1単元（オリエンテーションを含む全8時間）の体育授業実践を分析の対象とした。

2. 期間

平成20年（2008年）8月下旬～10月上旬

3. 調査・測定項目及び方法

1) 教師の把握に関する調査・測定項目及びその方法

(1) 教師の教授意図

単元計画段階ではインタビュー形式の聞き取り調査により把握し、毎授業後には再生刺激法による聞き取り調査をビデオカメラにより記録し、把握した。

(2) 授業間の教師行動

授業間に教師が行った活動をインタビュー形式の聞き取りにより確認、記録した。

(3) 授業中の教師行動

授業中の言語による行動を把握するために、ワイヤレスマイク及びビデオカメラを用いて観察、記録した。

2) 子どもの把握に関する調査・測定項目及び方法

(1) 子どもの実態についての聞き取り

担任教師に子ども個々人の特性についての記述式の調査とインタビュー形式の聞き取り調査を実施した。

(2) 運動に対する有能性

子どもの運動に対する有能性を、岡澤らの作成した運動有能感に関する調査を用いて実施した。単元終了

後にも同様の調査を行った。

(3) 体育授業に対する態度

子どもの体育授業に対する態度を、高田らの作成した小学校高学年用の態度測定による体育授業評価法を用いた調査により把握した。単元終了後にも同様の調査を行った。

(4) 単元開始時の子どもの感想文

子どもの教材に対する学習意欲を把握するために自由記述形式の感想文による調査を実施した。

(5) 授業中の学習行動

子どもの学習行動を把握するためにビデオカメラを用いて観察、記録した。

(6) 授業ごとの学習成果

教師の関わりにより意図通りの学習成果をもたらすことができたかどうかを把握するために、高橋らの作成した質問紙法による形成的授業評価を実施した。

(7) 子ども相互の関係に関する調査

毎授業後、子ども相互の自己開示と受容の関係を把握するために自由記述形式による調査を実施した。

(8) 単元終了時の子どもの感想文

単元を通した子どもの変容や学習成果を、自由記述形式による感想文で把握した。

4. 結果の処理の手続き

1) 担任教師への聞き取り調査の処理について

担任教師へ行った聞き取り調査の結果は、その記述された内容とインタビューの結果を記録として記述し直し、その内容の分析を行った。また、再生刺激法により得られた教授意図は、ビデオカメラによる記録から記述し直し、その内容を分析した。

2) 尺度構成法にもとづき作成された調査票及び学習行動の結果の処理について

調査票についてはそれぞれの調査法の手続きにしたがい得点化した。また学習行動について、トライアル回数は個人とそのグループの総数を、サポート時間はグループでの総時間としてそれぞれ算出した。

3) 自由記述形式で行われた調査等の処理について

子ども相互の関係に関する調査については、子どもの自己開示と受容に関わる記述内容を取り上げて分析した。また、子どもの感想文については、学習成果を把握するためにその記述内容を分析した。授業中の教師の言語行動については、記録した行動を逐語記録として記述し直し、その内容を分析した。

III 研究の結果、及び考察

1. 対象教師の実践における考え方と実際の授業実践における取り組み

1) 対象教師の教育観について

インタビューによる聞き取りの結果、対象教師は子ども達に対して「自分自身を大切に思っしてほしい」「友達を大切に思っほしい」という想いを持っており、周りの仲間に優しく、思いやりを持った子どもになってほしいという教育観を持っていることが明らかとなった。

2) 対象教師の子ども把握について

対象教師は、教育観を踏まえて目の前の子ども達に今必要なことは何かを考え、それを子ども達に獲得させるためにもグループ編成を慎重に行い、意図的に授業を仕組もうと考えていることが理解できた。

3) 教材について

対象教師は教材の特性を踏まえ、子ども達の実態に応じた技や内容の設定、グループにおける役割の設定といった課題設定を子ども達の学習意欲との関連から捉えていることが把握できた。

4) 単元の計画について

1) から3) の考えを踏まえ、対象教師は子ども相互の自己開示と受容の関係を成立、促進させるため、子ども達の学習意欲が低下しないようなグループ編成、課題設定、教材の工夫などを行い、子ども同士の関わりを必然的に生み出すことを意図して単元計画をした。

5) 単元の過程と子どもの学習成果について

単元前後の運動有能感、体育授業評価をみると、全ての因子項目で単元後は単元前よりも高い値を示していた。また、子どもの感想には「ぼくは何かができなくてもどうでもいいと思っていたけど、跳び箱では友達が跳べないとなぜか一生懸命教えていました。今までどうでもいいと思っていたことがそうではなくなったということです」というような記述が多く見られた。このことから、教師の意思決定を経た関わりの繰り返しによって、「その子に今必要なこと」、すなわち身に付けさせたい学習成果を単元を通して獲得させることができるといえる。

2. 抽出児 緑4児への関わりについて

対象教師は、緑4児について、単元前は「何事にもやる気が見られない」と把握していた。しかし、第2時、第3時の振り返りシートの記述内容から、自分なりの考えをきちんと持って学習に取り組んでいると把握しなおしている。そのため、自分の思いを自信を持って自己開示できるようにさせたいという思いから、みんなに認められることで自信を持たせようという緑4児に対しての意図と、緑4児に対する「声をかけにくい子」という思いを変えられるようにというグルー

プの子ども達に対しての意図を持って緑4児をみんなの前で見本として跳ばせるという関わりを行っている。

対象教師はこのように、緑4児の実態把握を行い、明確な教授意図により判断、決定された関わりを繰り返し行った。その結果、緑4児が自信を持ち、そして学習意欲を高めたことが「授業後からの緑4児の教室での態度、行動に変化が見られだした」、「教室に得点のグラフを張り出したところ、緑4児が友達と一緒に興味を持ってすぐに近づいて見に来ていた」といったインタビューの結果からも理解できる。また、見本として跳んだ第4時以降の振り返りシートには「みんなと～」という仲間を意識した記述が見られるようになり、単元後のインタビューにおいて確認できた「緑4児が橙4をおんぶしている。まわりも緑4児に声をかけやすくなっている、そんなことは考えられなかった。ツーンとお姉さんぶっていたのに、今日の休み時間も緑4児と黄2児がよくしゃべっていた。」という緑4児の変化からしても、緑4児に学習成果を獲得させることができたといえよう。

3. 実践による検討のまとめ

子ども相互の自己開示と受容を成立、促進させる教師の関わりは、自己開示と受容を“促す”関わり（後押し）と自己開示と受容が“続けられる”関わり（支え）であるといえる。

対象教師は、自己開示を促したい子どもだけでなく、受容を促したい子どもに対しても関わっており、自己開示と受容の関係を成立させるためにも、教師はその両者に関わる必要があることが明らかとなった。また、関わった結果として、どのような学習成果が得られたのかを把握し、次の関わりを判断、決定していくというように、対象教師は常に子ども把握を行いながら繰り返し意思決定を行っていることが明らかとなった。

IV 総括

教師は常に集団と個人とを意識しており、「このような子どもになってほしい」という教育観にもとづいた意思決定によって個々人に応じた関わりを判断、決定していることが明らかとなった。しかし、学習成果として運動有能感や体育授業評価が単元前と比べて高い値を示していない子どももいたことから、子ども個々に応じてより適切な関わりを行っていくためにも、子ども把握において教師の関わりを決定する判断基準となっているものは何なのかといった詳細な意思決定について今後さらに検討を加える必要があると思われる。

主任指導教員 荒木 勉
指導教員 高田 俊也